

2020\_2\_2 解説補足  
2017\_11\_14 ラシテ追加  
2014\_7\_14~11\_3 付

## ホツマツタエ講座

### ホツマツタエ 1アヤ(綾) 解説文

ホツマツタエ研究家 吉田六雄

#### 1アヤ(綾)【件名】

##### ラシテ

##### カナ文字

四 卒 ㊦ 卒 ㊦ 去 元 ㊦ ㊦ 田 ㊦ 卒  
ホ 卒 田 ㊦ 四 卒 开 ㊦ 火 ㊦ 卒

ホツマツタエミハタノハツ  
キツノナトホムシサルアヤ

#### ホツマツタエ本文 解説

#### 1アヤ(綾)1(3~4行)~2(2行)【本文】

##### ラシテ

##### カナ文字

母 夷 ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ 爪 ㊦ 田 ㊦ 元  
△ 菜 ㊦ 夷 菜 爪 夷 ㊦ 母 ㊦ 卒  
㊦ ㊦ ㊦ ホ 田 卒 ㊦ 田 ㊦ ㊦ 去 菜  
㊦ ㊦ △ ㊦ ㊦ 菜 △ ㊦ 开 ㊦ 田 ㊦

ソレワカハ ワカヒメノカミ  
ステラレテ ヒロタトソダツ  
カナサキノ ツマノチオエテ  
アウウワヤ テフチシホノメ

#### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

神話、上代のアマカミ(天神)の時代、君、皇子は幼い頃からツツ歌、サツサ・ツツ歌、アヒツの歌、ヤカタの歌、ケリの歌などの和歌を嗜まれ、これが君、臣の素養を身に付ける教育方法であった。その甲斐があり、歌に秀でて歌人となられたヒルコ姫は、下照姫を賜われた。その後、更に研鑽されて、オヨシ神より和歌の歌人の最高位である「ワカ(和歌)姫の神」の称え名を賜われた。それがため、和歌と云えば、ワカ(和歌)姫の神を指すようになりました。その頃のワカ(和歌)姫は、約40歳~約45歳であったろうと思われます。

このように栄華を極めたワカ(和歌)姫の神ですが、1アヤ(綾)では、その栄華と対比するように、次の文章より、ワカ(和歌)姫、ヒルコ姫が、如何に幼い時に波乱万丈なスタートであったかを記述しております。

ワカ(和歌)姫の神、ヒルコ姫であるが、生まれられた頃、父母の天の節(厄年)に遭遇し、波乱万丈のスタートがきられた。ヒルコ姫の誕生は、スス暦の21鈴(紀元前330年)以前になります。イザナギ、イザナミの初子として生まれたヒルコ姫であるが、3アヤ(綾)4(1行)~5(4行)より引用すると、その年、父と母は、スズ40穂、31穂の天の節(厄年)に当たっていた。

そのため、父の穢れを払うため、僅か3歳になる前に、「磐楠船に 乗せ捨つる」の厄払いの行事で、川に捨てられて流されました。下流で待っていたカナサキの翁に 拾われて、幼い頃を翁の娘として拾たと育つことになります。

カナサキの邸宅の西殿は、子育ての屋形になります。帰りを待っていたカナサキの妻は、ヒルコ姫を抱き上げて 優しく乳を上げられた。ヒルコ姫は、カナサキの妻の乳を得て、気分も優れてあわうわやと喜ばれて、手ふちされたり、目をしほの目にされて悦ばれた。

### 1アヤ(綾)2(3行)~3(3行)【本文】

ヲシテ		カナ文字	
△ <sup>母</sup> 炎 <sup>風</sup> の	① <sup>开</sup> 飛 <sup>束</sup> 母 <sup>田</sup> 又	ウマレヒハ	カシミケソナエ
𐀀 <sup>𐀁</sup> 𐀂 <sup>𐀃</sup> 𐀄 <sup>𐀅</sup>	𐀆 <sup>𐀇</sup> 𐀈 <sup>𐀉</sup> ① <sup>𐀊</sup> 𐀋 <sup>𐀌</sup> 𐀍	タチマヒヤ	ミフユカミオキ
④ <sup>卒</sup> 風 <sup>母</sup> 𐀎	⑤ <sup>多</sup> 田 <sup>△</sup> 𐀏 <sup>𐀐</sup> 𐀑	ハツヒモチ	アワノウヤマヒ
𐀒 <sup>𐀓</sup> 𐀔 <sup>𐀕</sup> 𐀖 <sup>𐀗</sup> 𐀘	⑥ <sup>𐀙</sup> 𐀚 <sup>𐀛</sup> 𐀜 <sup>𐀝</sup> 𐀞 <sup>𐀟</sup> 𐀠	モモニヒナ	アヤメニチマキ
𐀡 <sup>𐀢</sup> ④ <sup>𐀣</sup> 𐀤	𐀥 <sup>𐀦</sup> 𐀧 <sup>𐀨</sup> 𐀩 <sup>𐀪</sup> 𐀫 <sup>𐀬</sup> 𐀭	タナハタヤ	キククリイワヒ

#### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

また、カナサキの翁の家ではイサナギ、イチナミに変わり、実の親のようにヒルコ姫の成長に合わせて、(1)生まれ日は 炊御食供え、(2)立ち舞や、(3)三冬髪置き、(4)初日餅 天地の敬ひ、(5)桃に雛、(6)アヤメに粽、(7)七夕および、(8)菊栗祝ひの行事(節句)が行われました。

### 1アヤ(綾)3(4行)~4(1行)【本文】

ヲシテ		カナ文字	
𐀮 <sup>𐀯</sup> 𐀰 <sup>𐀱</sup> 𐀲 <sup>𐀳</sup>	𐀴 <sup>𐀵</sup> ④ <sup>𐀶</sup> ① <sup>𐀷</sup> 𐀸 <sup>𐀹</sup>	キトシフユ	オハハカマキル
𐀺 <sup>𐀻</sup> ① <sup>𐀼</sup> 𐀽 <sup>𐀾</sup>		メハカツキ	

#### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

また、五歳の冬(11月)になりますと、男の子は袴着る祝いの行事がなされていたとのことです。この五歳の記述は、神武天皇の幼少の27アヤ(綾)80(4行)~81(2行)の記述より引用しますと、「タネコは皇子の 大御守 皇子タケヒトは 年五つ」と記述されており、アマテル神の頃も神武天皇の頃も五歳は男の節目であったことが確認されるようです。

また、女の子は、外出に頭に被(かづ)く衣服を着て、お祝いしたようです。だが、「女は被衣」時の年齢が、ホツマツタエに年齢の記述がなく不明です。



長らえりされました。またヒルコ姫を養育された住吉の翁自身も血の巡りが良くなるのを体験されており、これお知ると云われていました。

### 1アヤ(綾)7(2行)~9(2行)【本文】

ヲシテ		カナ文字	
	夕① 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺		ワカヒメサトク
① 田 田 水 舟	水 卒 田 田 田 田	カナサキニ	キツサネノナノ
𠩺 𠩺 田 田 田	夕 水 田 田 夕 田	ユエオコフ	オキナノイワク
𠩺 田 夕 卒 田	① 开 夕 田 开 田 开	ヒノイツル	カシラハヒカシ
夕 卒 田 田 田	田 田 卒 田 田 田	タケノボル	ミナミルミナミ
𠩺 田 田 卒 田	舟 开 田 舟 田 卒	ヒノオツル	ニシハニシスム
田 卒 田 卒 田	① 夕 舟 田 田 田	ヨネトミヅ	カマニカシクハ
田 田 开 夕 田	舟 卒 田 田 田 田	ヒカシラヤ	ニエハナミナミ
舟 卒 开 卒 卒		ニエシツム	

### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

ワカ姫(幼い時の話であり、この頃はヒルコ姫と云う)は、イサナギ、イサナミの長女として生まれ、また、生まれた時より聡く(物わかりがよい)、イサナギの左臣のカナサキ(翁)に 1音節の キ(東)、ツ(西)、サ(南)、ネ(北)の名の故(わけ)お請ふ(願い求める)のでした。

だが、次にカナサキの翁がヒルコ姫へ説明された方角の言葉は、キ(東)、ツ(西)、サ(南)、ネ(北)などの一音語の説明でなく、2~3音節の言葉のヒガシ(東)、ニシ(西)、ミナミ(南)、キタ(北)であった。このことは、すでにヒルコ姫、カナサキの翁の当時においても、全ての方角の言葉は、2~3音節のヒガシ(東)、ニシ(西)、ミナミ(南)、キタ(北)に定着していたことが推定され、そのため、前述のカナサキの翁の2~3音節の説明に繋がっていたと推測されます。また、その後の説明においても、太陽の一日の動き、ご飯の炊き方、人の営み、人の出会い、季節の変化などの例題に置き換えて、ヒルコ姫にわかり易いように説明されていたこととなります。

### 太陽の一日の動きより東南西の方角の説明

カナサキの翁の曰く(言うことには)、東とは、日の出る 頭は東より→ヒ、カシラ→ヒカシ(東)と云い、南とは、たけ昇る みな見る南より→ミナミル→ミナミ(南)と云う。また西とは、日の落つる 西は丹沈むより→ニシスム→ニシ(西)と云うと、ヒルコ姫に教えられた。

### 炊飯の仕方より東南西の方角の説明

更に、カナサキの翁の曰く(言うことには)、米と水を釜に入れてご飯を炊く方法ですが、まずお米を水で研ぎ、次に釜の米に対し水を適量入れて火をつけます。初めは、火頭やから東から太陽が上がる

ように炊き始め、お米の炊ける**煮え花**の匂いがする頃は、釜のご飯が高温となり蒸気がでており、太陽の位置する方角で云えば南になります。そこから、火を弱めてご飯(米)の芯が**煮える**まで、蒸らし、ご飯が炊き上がり**静む**ことで出来上がります。なお、驚くことは、この頃に陶器、釜などの食器によりご飯が炊かれていたことです。

## 1アヤ(綾)9(2行)~11(1行)【本文】

ラシテ	カナ文字
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	エカヒトタビノ
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ミケハコレ フルトシフヨリ
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ツキミケノ ヒトハモヨロニ
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ツキムケノ ヒトハフソヨロ
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	イマノヨハ タダフヨロトシ
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	イキナルル ミケカサナレバ
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ヨワヒナシ ユエニオンカミ
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	ツキニミケ ニガキハホナヤ

### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

エトの神の兄神になる**エ神**は**一度の御食事**をされましたが、この時の御食事は、**これが初めてのゾロ(米)**の米食でした。そして、稲作は、**古年(スス暦)**のエトの**二た**周りより始まり、その年の秋より、**一と月に三食**のゾロ(米)が食べられるように突ったとのことです。

その甲斐があって、**人は**長生きして**百万(穂)**に神上がりするまでになって来ました。その後、稲作りも順調に行き、ゾロ(米)の収穫も増え始め、**一と月に六食**のゾロ(米)が食べられるようになって来ますと、反対に、**人々は**早枯れするようになり**二十万(穂)**まで長生きするのが、やっとになって来ました。

そして、**今の世**は稲作りも陸稲と水稻の二種類の作付になり、稲の収穫も一段と増加して、**一と月の米食**の回数も、約24食(約10日に8食)になってきました。だが、人の寿命は一層早枯れし、**ただの二万歳**まで**生き慣れる**時代になっておりました。このように千代見草を食べる機会が減少し、**米の御食**が**重なる**ようになれば**二万歳**も生きなくなり、**齢もなし**になることは自明の世になってきました。

その点、アマテル神は、昔ながらに**一と月に三食**の米食を守られて、他は千代見草を多く食べられる生活をされておりました。**故に大神**の食事に関して、皆との間には、**一と月に三食**の米食が共有の認識になっておりました。

そして、月に三食の米食以外は、大神の常食であった**苦きハホナ**や山菜を食べられました。この甲斐があって、アマテル神は28アヤ(綾)36のように「**苦き**を食みて 百七十三万 二千五百年」以上も長生きされたのでした。

### 1アヤ(綾)11(2行)~13(2行)【本文】

ヲシテ	カナ文字
𠩺𠩺𠩺𠩺	ミナミムキ
𠩺𠩺𠩺𠩺	アサキオウケテ
𠩺𠩺𠩺𠩺	ナガイキノ
𠩺𠩺𠩺𠩺	ミヤノウシロオ
𠩺𠩺𠩺𠩺	キタオイフ
𠩺𠩺𠩺𠩺	ヨルハネルユエ
𠩺𠩺𠩺𠩺	キタハネゾ
𠩺𠩺𠩺𠩺	モシヒトキタリ
𠩺𠩺𠩺𠩺	コトワケン
𠩺𠩺𠩺𠩺	アワネバキタヨ
𠩺𠩺𠩺𠩺	アフハヒデ
𠩺𠩺𠩺𠩺	ミナミニコトオ
𠩺𠩺𠩺𠩺	ワキマエテ
𠩺𠩺𠩺𠩺	オチツクハニシ
𠩺𠩺𠩺𠩺	カエルキタ
𠩺𠩺𠩺𠩺	ネヨリキタリテ
𠩺𠩺𠩺𠩺	ネニカエル

### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

26鈴17枝23穗(紀元前280年)の三月初日に、キヨヒト(ニニキネ)は宮造り法を定められるや、そのニハリ(新治)宮の中墨柱は、21アヤ(綾)5(1~4行)より引用しますと、南向きと決められました。このようにして**南向き**に建てられた宮は、人の一日の生活の営みを表現するように、夜明けから午前中に目一杯の**朝気お受けて**、7アヤ(綾)59(1~2行)より引用しますと、「清く朝日お 拝み受け 良き子生むなり」また、14アヤ(綾)27(1~2行)より引用しますと、「朝日のウルお 身に受けて」と、邪気(病気を起こす悪い気)が入る余地を与えず、皆は**長生き**の恩恵を受けるようになりました。

その恩恵により、**宮の後ろお 北と云ふ**ようになりました。また古の寝室(または、病人の寝室)は、宮の中でも一年間を通じて、気温の変化が少ない北の方角と決められており、**夜は寝る故 北はネ(1音節の北をネと云う)ぞと**、カナサキの翁はヒルコ姫に説明されておりました。

人の出会いも方角で説明できると、カナサキの翁は続けてられました。**もし人が貴方(ヒルコ姫)に会いたいと遠方より来たり**された時は、色々な理由で**事別し**、もしも 会わなかったらどうでしょうか。この場合**会わねば北**のように「心静か」が良いのですが寂しい限りです。貴女はヒルコ姫。イサナギのアマカミ(天神)の娘ですよ。器量を疑われます。また、喜んで会ふことになれば、互いに顔を向かい**合う**ことは、日出、太陽の上端が地平線上に現れるように**ヒデ**になります。

更に、お互いの健康、家族の健康を確かめて、旧知の間を取り持つことができれば、心が躍るよう高揚し、方角では南になります。その中でも良い事、悪い事お わきまえて(物事の違いを見分けること)おられるようですので、カナサキの翁は安心しております。

そして、友と別れた後は、心を次第に落ち着かせて下さい。落ち着く気持ちは西になります。そして、宮(家)に帰るは北になります。語呂合わせのように聞こえますが、ネ(北)より来りて ネ(北)に帰る。このように、北を出発し、東、南、西と周って北に帰るように、方角の意味を説明されておりました。

### 1アヤ(綾)13(2行)~15(3行)【本文】

ラシテ	カナ文字
木の ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧	キハハルワカバ
⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬	ナツアオバ アキニエモミヂ
⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱	フユオチバ コレモオナシク
⑲ ⑳ ㉑ ㉒	ネハキタニ キザスヒガシヤ
㉓ ㉔ ㉕ ㉖	サニサカエ ツハニシツクル
㉗ ㉘ ㉙ ㉚	ヲハキ ミノ クニヲサムレハ
㉛ ㉜ ㉝ ㉞	キツオサネ ヨモトナカナリ
㉟ ㊱ ㊲ ㊳	キハヒガシ ハナハモミナミ
㊴ ㊵ ㊶ ㊷	コノミニシ ミオワケオフル
㊸ ㊹ ㊺ ㊻	キノミュエ キミハオメカミ

### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

また東南西北を季節の変化でも説明できると、カナサキの翁は続けられました。冬の間徐々に膨らんで春を待ち望んでいた木の芽は、春先に萌え出て芽となり、生え出て間のない淡い緑の若葉となります。夏には、青々と茂った深い緑色の青葉になり、秋には、煮え紅色の葉に変わります。冬になると散り落ちた木の葉になり、役目を終えます。これも今までの説明に同じく、ネ(寝る)は北に 兆す(草木が芽を出す)東や サ(南)に榮ふ(勢いが盛んになる)ツ(西)は西を作る(ある力を働かせて、新しい物事を生み出す。)ヲ(中央)は天神の君の住む天の原になり。天神の国を治むれ(世の中や家の中を秩序ある状態にする)る範囲は 東西中南北の 四つ方角の周りと中央の天の原になります。

要約しますと、草木が芽を出すキザスは東になり、春の花、夏の青葉も南にありて、木の実が成熟し陽が落ちるは西になります。木のミ(実)も分けるようにお籬(フル)いにかけると、木の実の本来の故(理由)は、君(木の实→キのミ→キミ→君)であり、君(君→木実→キミ→キ・ミ→男・女→男女)とは男神と女神の夫婦神のことだと説明されるのでした。

1アヤ(綾)15(4行)~19(1行)【本文】

ラシテ

カナ文字

开① 𠩺 𠩺 𠩺	凡 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	シカルノチ	イサワノミヤニ
④ 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	𠩺 开 𠩺 𠩺 凡 𠩺 𠩺	ハベルトキ	キシキノイナダ
四 𠩺 𠩺 开 𠩺	凡 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	ホオムシニ	イタムオナゲキ
① 𠩺 ① 𠩺 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 凡 𠩺 𠩺 𠩺	アルカタチ	ツグルイサワノ
𠩺 𠩺 𠩺 ① 𠩺	① 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	オランカミ	アマノマナキニ
𠩺 𠩺 𠩺 ① 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	ミュキアト	タミノナゲキニ
𠩺 ① 𠩺 𠩺 𠩺	凡 𠩺 𠩺 𠩺 开 凡 𠩺	ムカツヒメ	イソギキシイニ
𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	ユキヒラキ	タノキニタチテ
𠩺 开 𠩺 𠩺 𠩺	① 𠩺 𠩺 𠩺 ① 𠩺 𠩺	オシクサニ	アフグワカヒメ
𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	④ 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	ウタヨミテ	ハラヒタマエハ
𠩺 开 𠩺 𠩺 𠩺	𠩺 ① 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	ムシサルオ	ムカツヒメヨリ
𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	コノウタオ	ミソメオマテニ
𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	タツマセ	オノオトモニ
𠩺 𠩺 𠩺 开 𠩺	凡 𠩺 𠩺 开 ④ 𠩺 𠩺	ウタハシム	イナムシハラフ

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

カナサキの翁がヒルコ姫に、東西南北の話をしてから、**然る後**(この間は、早くても約10年~約50年は経過していると考えられます。)のある日、アマテル神はいつものように**伊雑の宮**(三重県)にて、政務をされておりました。その側らでムカツ姫、ワカ姫は、**はべられる**などして**時**を過ごしておられました。

そんな中に、**紀志井**の民が**稲田**の稲が、**穂お虫**(稲を食べる虫、稲子、蝗)に食べられて、**稲穂が痛むお歎き大変だとのある状**(実際のありさま)の連絡が、大御神(アマテル神)の元に**告ぐる**(言葉などで伝え知らせる)ことになりました。それをお聞きになった**伊雑の宮の大御神**(アマテル神)は、稲作の先進地である**天の真名井**に御幸され、**稲虫の除去方法をお聞きになられたあと**、同行したムカツ姫にご指示をされました。

**天の真名井**まで聞こえていた**民の歎き**にムカツ姫は、**伊雑の宮**に帰るの止められて、**急ぎ紀志井**に行き、**開き**(稲作の具合)を確認されたのであった。そして、ムカツ姫自ら**田の東**に立ち、**オシクサ**(植物「ごまのはぐさ(胡麻葉草)」の古名)に**扇ふぐ**ことを施されました。またワカ姫は、**歌**を詠みて、**祓ひ**(神に祈ってけがれを清め、災厄を取り除くこと)**賜え**(恩恵をお授け下さい)られれば、**虫**は西の方向に**飛び去るお確信**されるのであった。



このことで、ムカツ姫よりワカ姫にご相談されて、ワカ姫が詠まれたこの歌お、三十女お田の東のワカ姫の左右に佇ませ(しばらく立ち止まる)られて、おのおの(めいめいの独唱)共(全員での合唱)に歌はしむことをされて、稲虫を祓う(脇へ追い退ける)ワカの呪いの和歌を歌われたのでした。

## 1アヤ(綾)19(2行)~21(4行)【本文】

ラシテ	カナ文字
ムカツ姫ノ田ノ東ノ	ワカノマジナイ
ワカ姫ノ左右ニ	タネハタネ ウムスギサカメ
タテマツル	マメスメラノゾロハモハメソ
ムシモミナシム	ムシモミナシム
クワカエシ	クワカエシ ミモムソウタヒ
トヨマセバ	トヨマセバ ムシトビサリテ
ニシノウミ	ニシノウミ ザラリムシサリ
エオハラヒ	エオハラヒ ヤハリワカヤギ
ヨミカエル	ヨミカエル ゾロニミノリテ
ヌバタマノ	ヌバタマノ ヨノカテオウル
オンタカラ	オンタカラ ヨロコビカエス

## 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

ムカツ姫は、三十女たちを田の東にワカ姫の左右に佇ませられて、「稲虫払う ワカの呪い」の和歌を歌わしていましたが、この「ワカの呪い」の歌詞を注意深く読みますと、「稲の種」を蒔く前の「良い苗床づくり方法」を歌っておりました。古代にはすでに地中にいる稲虫の幼虫を駆除する方法が発見されていたようで、「土を耕すことで日光と云う自然の光や風雪が虫を駆除してくれる」と歌っておりました。

## ワカの呪いの歌

種子は田根 ウムスギサカメ マメスメラの ゾロ葉も喰めそ 虫も皆死む

## ワカの呪い歌の意味

「稲の種子は、田んぼに根を張り育ちます。だが、種を蒔く前の土には、地中に虫の卵や幼虫がいます。その幼虫などを除するため、土をウムスギサカメ(掘り上げた土を逆立てにして崩し)して、マメスメラ(平らにまぶす)にします。そのことで、耕された土壌は太陽光や風雪に晒されるため、ゾロ(稲)葉も喰めそ(食物を噛んで食べる)の稲虫も 皆死む」ことになります。このワカの呪いの歌を繰り返し歌い、その回数は三百六十歌ひにもなり、その歌声は紀志井の稲田をどよませば(響き渡せば)、稲田より稲虫が飛び去りて、西の海へと、ざらり(多数の稲虫の羽根が触合う音)音を残して、稲虫が去りました。

このようにワカの呪いの行事を行ったことで、穢(けがらわし)お祓い、やはり(やっぱり)若やぎ(若がえる)して、傷んだ稲を甦(蘇生する)ることができたのです。秋には、ゾロ(陸稲)に実りてぬばたま(檜扇の種子)が沢山に実るように、稲の実が豊作になり、世の糧(世の生活を豊にするもの)を得ることができました。このように稲を蘇生させる「稲虫払う ワカの呪い」の歌が「御宝」となり、「ワカの呪い」を歌にしたワカ姫は、紀志井国の民に喜ばれ、民の喜びを知ったムカツ姫も更に喜び返すと申されました。

### 1アヤ(綾)22(1行)~23(3行)【本文】

ラシテ		カナ文字	
水开舟山舟	⊙夙田母貴飛母	キシキクニ	アヒノマエミヤ
雫母卒飛母	卒山夷の母山卒	タマツミヤ	ツクレハヤスム
⊙夙飛母田	山舟⊙卒単田山	アヒミヤオ	クニカケトナス
夕⊙夙飛母	田田夷田単単卒	ワカヒメノ	ココロオトム
雫母卒飛母	⊙夷雫山夙飛母	タマツミヤ	カレタルイネノ
夕⊙⊙返山	夕⊙田山雫母舟	ワカカエル	ワカノウタヨリ
夕⊙田山舟		ワカノクニ	

### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

紀志井国の稲虫騒動も一段落したのでアマテル神は、天日宮(アマテル神の宮)の前に、11アヤ(綾)3(1~2行)より引用しますと、「母の日の前 ムカツヒメ姫」のために、和歌浦湾の浜沿いの和歌山市毛見郷に天日の前宮を造られました。

また、9アヤ(綾)48(1~3行)より引用しますと、「なして和歌国 玉津島 歳徳神と 称えます」と記述しており、アマテル神は和歌山県和歌山市和歌浦中の玉津島に玉津宮を造られ、造れば休むと、ワカ姫は新たに造って頂いた玉津宮でゆっくりされるのでした。また天日宮は、ムカツ姫の天日の前宮が造られたこと、また天日宮はアマテル神の不在が多いことより、天日宮お クニカケ(クニのミカツコ<国造>)の宮となすとされて、クニカケ(国造)の宮に名を変えられたのでした。

紀志井の浜、現在の和歌浦を満喫されいたワカ姫は、稲田の穂虫の大群の再発生がないかと心お留む(留意:辞書→スルある物事に心をとどめて気を配ること。)ことに費やされて、その後も玉津宮に長居されておりました。そのことを承知していた紀志井の国の民衆は、この紀志井国を「枯れたる稲の若返る ワカの歌より 和歌の国」と称えました。(この時点では、未だ紀志井国→和歌の国には変更されてなく、次のワカ姫の回の歌には、「紀志井こそ」と詠まれていたことからわかります。)

1アヤ(綾)23(3行)~26(4行)[本文]

ヲシテ

カナ文字

	ヲシテ	カナ文字	
	ヲシテ	カナ文字	タマツノヲシカ
㊦ 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	アチヒコオ	ミレバコガルル
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ワカヒメノ	ワカノウタヨミ
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ウタミノメ	オモイカネテゾ
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ススムルオ	ツイトリミレバ
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	キシイコソ	ツマオミキワニ
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	コトノネノ	トコニワキミオ
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	マツゾコキシキ	
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	オモエラク	ハシカケナクテ
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ムスブヤワ	コレカエサント
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	カエラネハ	コトノハナクテ
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	マチタマエ	ノチカエサント
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	モチカエリ	タカマニイタリ
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	モロニトフ	

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

ワカ姫は、玉津の勅使(ワカ姫のために玉津宮を造営した時に、伊勢のアマテル神より玉津の宮に派遣された使者。)のアチヒコの容姿お、初めて見られれば 余りの凛々しさに、焦がられる(焦がれる一いちずに、激しく恋い慕う。)る。その機会は伊勢より紀志井国に来られた、アチヒコの「迎えの歌え」でした。ワカ姫は、その「迎えの歌え」で和歌の歌を詠み、アチヒコに捧げられました。

和歌を受け取ったアチヒコは、ワカ姫の歌が、見初め(異性を一目見て好きになる。)の歌であったため、一瞬、ためらわれ、その歌を讀んでいいものか否かと思ひ兼ねられて、さぞや迷われてしまわれた。それを見ていたワカ姫が、余りにもすすむるために、おもむろに、その歌を ついつい手に取り、よく良く見れば、その歌はアチヒコへのワカ姫の恋文であった。

「紀志井に派遣された貴方こそ、私の良き夫(せ)になる人でしょう。どうか、貴方の妻に迎えて下さい。そして、私お貴方の右際に寄り添わせて下さい。貴方が伊勢に帰られる前に、玉津島の宮の琴の音の漂う高床にて、吾の君がお越しになるのお、待ちに待つて さぞや 吾の君を恋しき気持ちになることでしょう。」

アチヒコが思えらく(考えること)には、浮橋(仲人)を懸けなくて(置かないで)結ぶ(婚約する)、やわ(いや、そうではない)。アチヒコは、ワカ姫より受け取ったこれの和歌を返さんと、その場で歌を黙読されたが、返らねばと思う気持ちとは裏腹に、歌の作られ方が飲み込めず、次に繋がる言の葉が出て来なくて、ワカ姫にお待ち給え(下さい)とご返事を差し上げられました。そして良く吟味した後に、





**解説文** (赤文字は、原文の現在訳です。)

先の1アヤ17～19にて、「ムカツ姫が紀志井の田の東に立って、オシクサ(排草)に 扇いだ」時のことを記述しておりましたが、「オシクサ(排草)と」の作られ方が説明されてなかった。そのため、当アヤ(綾)で補作説明されていた。

そもそも、稲虫を祓うための**そのオシクサ(排草)**とは、檜扇と云う植物を扇状に並んだ葉をそのまま利用して、更に檜扇を何枚に重ねて作られたものです。そして、種子の一個一個は、丸くて黒い色をしており、全体はブドウの房状で上向きになっています。この丸くて黒い色を昔より**ぬばたまの実**と云っておりました。また**花は、ほのほの**(ほのかに明るいさま)色をしております。また、この檜扇の種子と花を眺めていますと、種子は闇夜の**鳥羽**(はっきりわからないこと、見分けがたいことを例えて云う。)のようであり、花は一転して、地平線より昇る**赤きは日の出**のような艶やかな色をしております。

このような檜扇よりオシクサ(排草)を作るですが、檜扇には二つの意味があるようです。(1)一つは、植物の花を咲かせる檜扇で、葉は”扇”を広げたような姿で、これが「檜扇(ひおうぎ)」の名前の由来になったようです。(2)二つ目は、植木としての檜扇です。**檜扇(ヒアフギ)の 板もて作る**の文章より、檜扇の素材の檜の薄い白板をどじ合わせた扇にします。このようにして檜扇で作られたオシクサ(排草)を持ってムカツ姫、ワカ姫は、「田の東に立ちて 稲虫を扇して見ますと、稲虫は全て去り、紀志井の**国の**稲田が**お守り**がされて、紀志井も**治む**(平定する)ことになったとのことです。そして、後に、9アヤ(綾)41(3行)～42(4行)にて、下照姫がクシキネ(初代モノヌシ)に教えた、「押草に 扇げは」の**教ふ種は**、その後教材り、檜扇の形は「**鳥扇の葉は、十二枚の葉を扇状に組立てるなり**。」、そして、**檜扇の葉を重ねたオシクサ(排草)の祓ふ風は、みな祓ふ**ことで、延いては、「稲虫が去り 稲は若やぎる。」ことのできる古代の防虫道具の一つになっておりました。

**1アヤ(綾)32(3行)～36(4行)【本文】**

ヲシテ	カナ文字
◎ 夕 田 再 母 母 母	アワノヨソヤゾ
母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母	マタミソフ ミチナワスレソ
母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母	ハナキネハ キナニツツルオ
◎ 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母	アネニトフ アネノコタエハ
◎ 夕 田 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母	アワノフシ マタフハラヒ
母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母	ミソフナリ イマミソヒトハ
母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母	コノヲシエ アメノメクリノ
母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母	ミムソキエ ヨツミツワケテ
母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母	ミソヒナリ ツキハオクレテ

阿-母 阿 阿 阿	阿 阿 阿 阿 阿	ミソタラズ	マコトミソヒゾ
阿 阿 阿 阿	阿 阿 阿 阿 阿	シカレトモ	アトサキカカリ
阿 阿 阿 阿	阿 阿 阿 阿 阿	ミソフカモ	アルマウカガフ
阿 阿 阿 阿	阿 阿 阿 阿 阿	オエモノオ	ハラウハウタノ
阿 阿 阿 阿	阿 阿 阿 阿 阿	コエアマル	シキシマノエニ
阿 阿 阿 阿	阿 阿 阿 阿 阿	ヒトウマレ	ミソヒカニカス
阿 阿 阿 阿	阿 阿 阿 阿 阿	メハミソフ	ウタノカズモテ
阿 阿 阿 阿	阿 阿 阿 阿 阿	ワニコタフ	コレシキシマノ
阿 阿 阿 阿	阿 阿 阿 阿 阿	ワカノミチカナ	

**解説文** (赤文字は、原文の現在訳です。)

ワカ姫は、和歌の道を幼少のハナキネ(後のニニキネ)に教えられておりました。アワの歌は、「ア」が始まり〜「ワ」で終わる四十八文字の歌です。また、アワの文字数の三十二文字を用いて、人の気持ちを表すこともできますが、その和歌の道に通じる和歌の「なにか」の本質をハナキネは忘れておりました。そのため、ハナキネは、自らアワの歌の五七調に繰る理由をお姉に問ふのでした。

その姉の答えは、「和歌の歌には、天地の節に源を求めることができます。そして、昼と夜が交互に繰り返す、地球が太陽の回りを一周し、年が変わることを天地の節と云いますが、この間の一年間を天の巡りと云うのです。」またハナキネが姉に問ふことには、「祓ひの和歌は、三十二の文字になりますが、今の和歌は、五七五七七の三十一文字です。そうしますと、三十一とは、特別な意味があるでしょうか？

それに対し、姉の答えは「古の典に教え」があるのです。そして、この古の典の教系には、「天の巡りの日数が、三(百)六十五回も重なり、この重なりを四つに分け、更に四つの一つ一つを三つに分けることができます。」この結果、一と月の平均日数は、三十日と約半日(0.42)になり、その約半日も、日が始まっておりまかので一日に数え、ひと月は三十一になる元になります。

だが、朔〜満月〜朔までの一朔望月は今も昔も二十九日と約半日(0.53)のため、月は遅れて三十足らずです。だが、真とは、太陽の天の巡りにより、ひと月の日数は三十一日である。しかれとも三十一日の後先(ある場所の前と後ろ)かかりを考慮すると、三十二日になるかもしれない。このようにひと月の日数に一日の余裕があると、一瞬の間ができ、このことを物陰やすきまから様子を窺う、汚穢(けがれていること)物お、誤って身、心、魂に取り込んでしまう恐れがあるのです。

そのため、汚穢物の侵入を防ぐための祓うは、和歌の歌に声を重ねて余る和歌の一節を詠むことで、更に、お祓いの効果が生じると、ワカ姫はハナキネに教えられたのでした。また、日本国の別称で

ある敷島のエナ(胞衣)に、人として生まれ、男は三十一日目にかす(現在の宮参り)し 女は三十二日に宮参りを行いました。この宮参りの行事は、現在でも残されることからわかると思います。

そして、人は和歌の三十一、三十二文字数をもとにして、生まれて来た喜びを和歌に詠み、ワ(地球)に答ふるのです。そして、これこそが 敷島の和歌の道の真髄かな。

(1 アヤ(綾) おわり)